

富山市新図書館整備のための 検討委員会報告



平成 22 年 4 月 21 日 (水)、5 月 12 日 (水) の 2 日間にわたり、中心市街地での整備が予定されている、新富山市立図書館本館についての検討委員会が開催されました。立野幸雄氏 (富山県図書館長会会長)、山崎佐和子氏 (富山商工会議所議員)、大西紀夫氏 (富山短期大学教授)、藤井裕久氏 (富山市 P T A 連絡協議会会長)、松崎訓子氏 (読み聞かせボランティア代表) の 5 名の委員が出席されたほか、アドバイザーとして、植松貞夫氏 (筑波大学大学院教授)、関幸子氏 (内閣府政策企画調査官) の 2 名が招かれ、活発な意見が交わされました。以下に、委員会で話し合われた、意見の概要をご紹介します。

1. 図書館本館のコンセプトについて

(1) 「地域を支える情報基盤としての図書館」について

①本館は図書館 25 施設の中核として機能する必要がある。そのためには、本館はこれまでの「貸出型図書館」から、ハイブリッド図書館に代表される「調査研究機能型図書館」へ移行することが望ましい。

②ハイブリッド図書館を目指すためには、職員の資質向上と他機関との連携を密にすることが重要である。特に司書の資質向上・能力開発を行い、IT やビジネスなどの専門分野の強化が望まれる。

(2) 「生涯学習・読書の拠点としての図書館」について

①大小複数の多目的スペースを整備し、グループ研究室や研修室としても活用できることが望ましい。



②現本館は閲覧席が少なく、リラックスして読書できるスペースとして閲覧スペースを充実すべきである。また、閲覧席は適度な明るさを持った、落ち着きがあるスペースとすることが望ましい。

(3)「知的資産の保存庫としての図書館」について

①資料が揃っていることが図書館の基本であり、できるだけ大きい書庫スペースを確保しておくことが望まれる。

②特別コレクション（山田孝雄文庫・翁久允文庫・岩倉政治文庫など）をきちんと保存・管理し、後世に継承できるよう、整備が必要である。

(4)「賑わいの拠点としての図書館」について

①ガラス美術館や博物館など周辺にある文化施設と連携をとり、文化的なつながりを持った活動が望まれる。

②図書館が中心市街地の賑わいの創出に寄与するためには、図書館としての本来的機能を発揮し、資料の充実を行うことが必要である。

2. その他

(1)蔵書規模及び運営について

①専門的な図書館職員を長期にわたり育成していくことが、施設を活かす基本である。長い期間に渡り蔵書を保存し、児童サービス等を充実させていくためには司書の力が必要であるが、現況をみると、他市の図書館に比べ職員数が少ないので司書の育成と職員体制の充実が望まれる。

②開架冊数が30万冊～40万冊となると、現本館の2倍～3倍であり、図書館利用の増大・業務量の増大が予想されるため、貸出・返却の機械化など、業務の軽減化の工夫についても検討する必要がある。

③新聞雑誌のタイトル数を、他の先進市なみに充実することが望ましい。

(2)建物設計上の留意点について

①使いやすく、入りやすい図書館設計が望まれる。たとえば、レファレンス窓口と貸出窓口の一体化、利用者用と荷物搬送用エレベーターの独立、ベビーカーも使えるよう広いエレベーター室の確保のほか、ユニバーサルデザインの視点も必要である。

②子どもたちが安心して使えるよう、死角のない、安全面に十分配慮した建物とすることが望まれる。

(3)付帯設備・施設（駐車場・駐輪場等）について

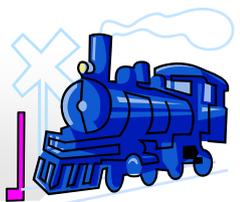
①自動車文庫は、面積の広い富山市には欠かせないものである。スムーズにサービスを行うためには、本館に自動車文庫及び連絡配本車の車庫を置くべきである。

②子ども連れや障害のある人など、公共交通だけでの来館は難しいケースがあるので、専用駐車場を整備したり、駐車場を1時間以内に限り無料にしたりするなど、交通手段に対する配慮が必要である。

③子どもたちだけでも来館できるよう駐輪場はぜひ必要である。

（本館 舟山）

いちおしライブラリー「列車の本」



「夜汽車」「夜行列車」…近年なかなか乗る機会のないものですが、懐かしさを覚える方も多いのではないのでしょうか。今回のいちおしライブラリーは「列車の旅」を紹介します。

では出発！



「寝台急行「昭和」行」
関川夏央／著
日本放送出版協会

鉄道・汽車好きの著者が電車（汽車）に乗って「昭和」をさがす旅に出かける紀行文です。富山では、1日で城端線・北陸線・万葉線・富山ライトレール・市内電車・富山地方鉄道に（おまけに県営フェリーにも）乗っています。列車を乗り継ぎながら、熱心な鉄道ファンだった宮脇俊三の思い出を語ります。



「女流阿房列車」
酒井順子／著
新潮社

次は、鉄道に恋する著者が書いた本です。いくら電車が好きとはいえ、あるときは24時間耐久鈍行列車の旅に耐え、またあるときは日傘片手に北陸本線の廃線跡を尋ねる旅にでます。「辛い、苦しい」といいながらも楽しそうな著者の姿に笑いつつも感心します。

鉄道ファンのなかでも女性のことを「女子鉄」というそうです。その女子鉄が集まって、さまざまなルートや駅・車体について語っているのがこちら。



「女子鉄」
女子鉄制作委員会／著
マーブルトロン

この本には、ファンならではの少々マニアックな対談が載っています。圧倒されていけない…ところもあるかもしれませんが、線路をながめることのできるカフェやホテル、旅のおみやげ、おしゃれに鉄道に乗るファッションなど鉄道ファンへの入門書として楽しめます。



「車窓で旅する日本列島
東日本編・西日本編」
猪井貴志／著
交通新聞社

最後に乗るのは、車窓からの景色を楽しむことのできる電車です。桜のトンネルをくぐり、きらめく海を楽しめる電車の旅。

鮮やかな彩りを見せる日本の四季を鉄道の車窓から写し取っている本です。

さて、鉄道ファンへの一步を踏み出したら、旅先への移動手段としてだけでなく、鉄道そのものを楽しむ旅にでてみませんか？
(本館 山崎)

岩倉政信文庫の資料 其の11

江戸時代中期、越中砺波地方で宝暦騒動という一揆が起きました。城端町近村の農民に下層町人が加わり、米屋を打ちこわしたもので、北市騒動、城端騒動とも呼ばれています。これを題材にした小説「田螺のうた」は、昭和 37～38 年に赤旗日曜版に連載されました。

長雨に苦しむ百姓達が祈祷に集まるなか、くろ市と名乗る男が現れ、米の値段をつりあげたい米屋達が雨乞いをしたと、北市村の若者に囁きます。元百姓のくろ市は、今は勤皇志士の組織に加わり、手裏剣の名手となっていました。やがてくろ市と北市村の百姓らは大規模な一揆を企てます。村祭りにさえ白々しさが漂うほど農村は疲弊していましたが、



〈写真(右)は「ばんどり騒乱記」が掲載された総合演劇雑誌「テアトロ」昭和41年5月号〉

「食わせんかーいッ」と進む集団は、「一世一代の祭り」のエネルギーを発していました。

昭和41年には岩倉自身によって「ばんどり騒乱記」の名で戯曲化され、劇団青年座が東京で上演したほか、大阪でも上演されました。富山では54年に県内の劇団による合同公演が行われ、成功をおさめています。(本館 海野)

レファレンスあれこれ

今回は岩瀬に関する質問をご紹介します

Q. 岩瀬で活躍した犬島宗左衛門とは
どういう人物か知りたい。

A. 犬島宗左衛門は明治22年、東岩瀬町に生まれました。かつて北前船の交易で繁栄した東岩瀬港は、鉄道の普及や神通川の馳越工事により近代海運業として遅れを取っていました。宗左衛門はこの状況を憂い、新聞「日本海之岩瀬」を創刊し、当局を批判します。その様子は「越中人譚 第62号」(チューリップテレビ2003)に紹介されています。また富岩鉄道や富岩運河の建設を含む、当時の東岩瀬港復活運動での尽力が「実録越中魂」(北日本新聞社2006)「バイ船研究 第3集 第6集」(岩瀬バイ船研究会1991、2002)に掲載されています。

Q. 岩瀬^{ひきやままつり}曳山車祭について
知りたい。

A. 岩瀬曳山車祭は、毎年5月17日、18日に行われる岩瀬諏訪神社の春季例大祭です。曳山車は、お囃子や木遣り唄とともに曳き回され、夜には各町内が激しくぶつかり合う荒々しい曳き合いが繰り広げられます。毎年趣向を変え工夫がこらされた「たてもん」も、見所です。岩瀬地区では老いも若きも一年で最も心待ちにしている行事で、その起源は万治二年(1659年)といわれています。岩瀬曳山車祭に関する本には、「岩瀬の曳山」(富山大学人文学部1991)「岩瀬曳山車祭」(岩瀬曳山車祭調査会1992)などがあります。(岩瀬分館 清川)